

八木重吉と宮澤賢治

——〈病床ノート〉を中心に——

今 高 義 也

はじめに

一 宮澤賢治「雨ニモマケズ手帳」をめぐって

二 八木重吉「病床ノオト」とその周辺

おわりに

はじめに

八木重吉（一八九八—一九二七）と宮澤賢治（一八九六—一九三三）は、日本近代詩史において、高村光太郎によって確立された口語自由詩をそれぞれの宗教的立場と言語感覚によって継承し、独自の作風を示した詩人として位置づけられている¹⁾。両者とも生前は認められなかったが、共に草野心平によって〈発見〉され、死後次第にその評価は

高まった。⁽²⁾ 無名な地方の学校教師にすぎなかった二人が突如詩人として出現した時期も重なっており（別掲「八木重吉・宮澤賢治 略年表」参照）、宗教的〈求道〉という詩作における共通のモチーフと対照的な詩風への関心とも相まって、二人の対比はこれまでも興味あるテーマとして取り上げられてきた。

恩田逸夫「宮澤賢治と八木重吉」（『國文学 解釈と教材の研究』第六卷第十号〈一九六一年三月〉所収）は、「兩者とも、永遠なもの無限なものを凝視している宗教性において、あるいは根源的なもの素朴なものに愛着し虚飾や見せかけをいとう本質的現象観において同質の点を有する」が、「その現われ方においては相当異なった様相を呈している」とし、兩者の第一詩集の名称——『春と修羅』（賢治、一九二四年刊）と『秋の瞳』（重吉、一九二五年刊）——について、「動的と静的、複雑と単純との対照を象徴するようである」と指摘、「ふたりをたとえれば、『まこと』を求めて彷徨する『修羅』（『賢治』）と、ひっそりと光を受けて照り返している『玉』（『重吉』）とでもいえるだろうか」として、「賢治の側に規模の大きさが認められる」と述べている。穩健妥当な説とすべきであろうが、対比の論としては重吉への言及が薄く、賢治評価に重きが置かれた考察になっていることは否めない。

田中清光「求道と詩——八木重吉と宮澤賢治」（同著『大正詩展望』〈筑摩書房、一九九六年〉所収）は、兩者の作品の内実を初めて本格的に対比しつづ論じたものである。そこには次のような傾聴すべき指摘がなされている（傍線は引用者による、以下同じ）。

八木重吉と宮澤賢治という二人がほぼ時期を同じくして出現したということは、この時代の特徴的な出来事の一つといつてよいと思われる。近代の詩人のなかで、宗教上の求道者といえる生き方を生きながら詩を書き、しかもその詩の成立、構造、内実に求道者としての内面の在りようが深くかかわっており、さらに作品として見て

重要な独自性をもっているというこの二人に匹敵する例は、前にも後にもみられないからである。／そうした在り方のゆえに、この二人の詩は、わが近代詩に独特な詩的言語をもたらしている。八木重吉はキリスト教（無教会主義）、宮澤賢治は仏教（法華経）の信者であったが、いずれもが信仰者としてみずから求道につきずめ、すくなくともその宗教的な信条が詩を書くことの促しの中核につねに働いていたし、微妙な差異はあるが詩を書くことが信仰につきすすめる作用をもっていたという点も、共通点としてあった。

重吉の短い簡潔な口語詩、とくに晩年の口語話法に近づきながら魂の光景を一闪で見せる表現、賢治の方は巨大な展開力を持つヴィジョン宇宙を口語に独特の韻律をもたせて雄弁に書いたという対極的な作物は、わが口語詩の表現領域をそれぞれの方位へ広げたとはいえると思う。（中略）賢治が修羅を自らに見る苦悩する矛盾な存在としてふかい屈折をその内にもっていたという内面を、作品の構造にも反映し、重吉の方は幼児にも近い心で無垢に神を呼ぶというひたすらな単純化で超越へと向かう営みを文体にまで具現化した、という二人の詩人の本質的な在りようが作品の形質とも結びついている。

田中説は、これまで賢治に傾きがちであった評価の在り方を修正し、重吉詩と賢治詩とが、共に日本の口語詩の「表現領域をそれぞれの方位へ広げ」る役割を果たしたと位置づけている。

これらの説に共通するのは、それぞれの宗教的背景に由来する重吉詩・賢治詩の独自性・希少性への評価と、賢治におけるその言語宇宙の豊かさ・内に矛盾をうちにはらむ「修羅」としての〈複雑さ〉に、重吉の簡潔で無垢なる〈単純さ〉を対置することであろう。しかしかような図式ではたして両者の本質、特に重吉の詩人としての実存を捉えうるであろうか。

本稿では、これまでの研究では未だ十分な対比検討がなされていない両者最晩年の〈病床ノート〉——重吉の「病床ノオト」（五冊）と賢治の「雨ニモマケズ手帳」——を主たる資料として、両者の晩年に通底する実存的な問題——生命の終末を意識せざるを得ない中で詩人が向き合ったもの——を検討し、通説においてなされている両詩人の対蹠的な性格規定の再検討を試みたい。これらの作業を通して、詩人八木重吉の信仰と詩表現の特質に接近することが本研究の課題である。

一 宮澤賢治『雨ニモマケズ手帳』をめぐって

賢治のいわゆる「雨ニモマケズ手帳」（以下「手帳」）は死後賢治のトランクの中から発見されたものである。その冒頭に書き入れられている文言から、一九三一年九月二〇日、上京後に発熱して死を覚悟し、帰郷して自宅療養に入った際に書き始められたものとみられる。賢治の病中手記はこの手帳で中絶しており、事実上の絶筆といつてよい。『校本宮澤賢治全集』（筑摩書房、一九七七年）の編者は次のように解説している。

本手帳は、他の手帳・断片に比べて空白の頁が非常に少なく、破棄紙片の残存を含めてわずか五頁にすぎない。また、他の手帳・断片のほとんどに、文学作品の下書・改稿等のほか、肥料設計・花壇設計・炭酸石灰販売等に関するメモ、その他日常生活に関するメモが混在しているのに対し、この「雨ニモマケズ手帳」にはそれが見当たらず、文学作品の下書等のほかの大半は經典の語句（「兄妹像手帳」を除けば、これが記入されているのは本手帳だけである）・信仰上の悲願・反省等で占められている。いわば他の手帳・断片が、健康で旺盛な行動的生活を示す動的な手帳とするならば、本手帳は病床にあっての思索生活を示す静的な手帳といえよう。

かくしてまずは「手帳」の冒頭に現れ、さらに何度か引用される「経典」の字句から検討していきたい。⁽³⁾

「道場」としての現世

「手帳」の冒頭に見えるのは、自宅療養に入った直後に記されたものとみられる、次の字句である。

当 知 是 処
即 是 道 場
諸 仏 於 此
得 三 菩 提
諸 仏 於 此
轉 於 法 輪
諸 仏 於 此
而 般 涅 槃

この「道場観」は国柱会の経本「妙行正軌」（田中智学編）の巻頭第一に掲げられているもので、「真読訓読とちらでもよい。一方をえらび至心念誦する」べきものとされている。この現世は「道場」であり、諸仏もここで悟りを得た。この病床もまた、自らが悟りを得るための「道場」であると観じなければならない、というのであろう。「手帳」

には、この直後の頁に次の字句がある。

南無浄行菩薩

南無上行菩薩

南無妙法蓮華經

南無無辺行菩薩

南無安立行菩薩

これはしばしば「手帳」に書き込まれているもので、賢治がその縮刷本を常に枕頭の書架中央上段に掲げていたという「十界曼荼羅」(図版資料①)から抜粋した〈略式曼荼羅〉にほかならない。この間の賢治の内的消息は、続けて書き込まれている次のようなメモから看取される。

病血熱すと雖も／斯の如きの悪念を／仮にも再びなすこと勿れ／斯の如き瞋恚先づ／身を敗り人を壊り／順次に増長し／て遂に絶するなからん／それ瞋恚の来る処／多くは名利の故なり／血浄く胸熱／せざるの日一切を／身自ら明利を離れたりと負し／童子嬉戯の如くに／思ひへ私に大心をほこ／るとも見よ／私にその／念に誇り酔ふとも／見よ四大僅に和／を得されば忽ちに／諸の秘心斯の如きの／悪相を現じ来って／汝が胸中を馳駆し／或は一刻／或は二刻或は終に／唯是修羅の中を／さまよふに／非ずや／さらばこれ格好の／道場なり／三十八度九

度の熱惱／肺炎流感結核の諸毒／汝が身中に充つるのとき／汝が五蘊の修羅／を化して或は天或は／菩薩或仏の
国土たらしめよ／この事ならずば／如何ぞ汝能く／十界成仏を／談じ得ん

ここで注目したのは、「瞋恚〔いかり〕」の問題が病中の「悪念」として特に取り上げられていることである。それは更に少し後の頁に記されている次のような自戒の断片からもうかがうことができる。

◎／他の非を忿りて／数ふるときは／さながら／大なる鬼神の／ごとく／わづかに／身の非を／思へるときは
／母そのうなゐを／見るにも／似たり

かくしてかような「瞋恚」にとらわれ「修羅の中を／さまよふ」状況こそ「格好の／道場なり」として、次のような〈病中の祈願〉が記される。

◎ 快樂も／ほしからず／名／もほしからず／いまはたゞ／下賤の廢軀を／法華經に／捧げ奉りて／一塵をも／
点じ／許されては／父母の下僕と／なりて／その億千の／恩にも酬へ得ん／病苦必死のねがひ／この外に／なし

一切の「欲」を離れ、ただ法華經の真理の「一塵」を明らかにするために自らの「下賤の廢軀」を捧げ、父母の「億千の恩」に報いることが「病苦必死のねがひ」である、というのである。やがて病が快方に向かい始めた日のメ

モであらうか、十月二十九日の日付がある頁には次のように記されている。

◎ 疾すでに／治するに近し／警むらくは／再び貴重の／健康を得ん日／苟も之を／不徳の思想／目前の快樂／つまらぬ見掛け／先づ―を求めて／以て―せん／といふ風の／自欺的なる／行動／に寸毫も／委する／なく／敵に／日課を定め／法を先とし／父母を次とし／近縁を三とし／〈社会〉農村を／最後の目標として／只猛進せよ／利による友、快樂／を同じくする友尽く／之を遠離せよ

欲を離れた病中においても、一たび「治するに近」きことを感ずるや、こうしてみずからを「警む」る言葉が記される。「先づ―を求めて／以て―せん／といふ風の／自欺的なる／行動」とは、「名利」「快樂」を目的とした打算的行為のことであらう。そしてこの五日後の十一月三日の日付で、「雨ニモマケズ」が書かれるのである。

修羅の悲願としての「雨ニモマケズ」

雨ニモマケズ／風ニモマケズ／雪ニモ夏ノ暑サニ／モマケヌ／丈夫ナカラダヲ／モチ／慾ハナク／決シテ瞑
ラズ／イツモシツカニワラツテ／キル／一日ニ玄米四合ト／味噌ト少シノ／野菜をタベ／アラユルコトヲ／ジブ
ンヲカンジョウニ／入レズニ／ヨク／ミキキシ／ワカリ／ソシテ／ワスレズ／野原ノ松ノ林ノ蔭ノ／小サナ萱ブ
キノ／小屋ニキテ／東ニ病氣ノコドモ／アレバ／行ッテ看病シテ／ヤリ／西ニツカレタ／母アレバ／行ッテソノ
／稲ノ束ヲ負ヒ／南ニ／死ニサウナ人／アレバ／行ッテ／コハガラナクテモ／イム／トイヒ／北ニケンクワヤ／

ソシ ヨウガ／アレバ／ツマラナイカラ／ヤメロトイヒ／ヒドリノトキハ／ナミダヲナガシ／サムサノナツハ／オ
ロオロアルキ／ミンナニ／デクノボート／ヨバレ／ホメラレモセズ／クニモサレズ／サイフ／モノニ／ワタシ
ハ／ナリタイ

これまで引用してきた經典の字句とメモの延長上にこの「詩」が位置していることは一見して明らかであろう。「丈夫ナカラダ」を持つという第一の願いから始まり、「ミンナニ／デクノボート／ヨバレ／ホメラレモセズ／クニモサレズ」という境地に至るこの「詩」は、実際には「サイフ／モノニ／ワタシハ」ナレナイ、という「修羅」としての自己を見詰めている賢治の〈悲願〉に他ならないことがわかる。そしてこれも知られていることではあるが、この「詩」の直後の頁には、再び次のような〈略式曼荼羅〉が書き込まれているのである(図版資料②)。

南無無辺行菩薩

南無上行菩薩

南無多宝如来

南無妙法蓮華經

南無釈迦牟尼仏

南無淨行菩薩

南無安立行菩薩

〈略式曼荼羅〉は「手帳」の冒頭の「妙行正軌」の引用の後にもあった（「雨ニモマケズ」の後の方がより正確な引用となっている）。「悪念」にもだえる「修羅」として、この世を「道場」と捉え、諸仏にひたすら祈願を捧げる賢治の姿がある。「雨ニモマケズ」はいわば諸仏に奉納するもののごとくに書かれたとみることができ、更にこの後の頁にみえる次のような自らに向けた警句も、それを示すものだろう。

◎ 凡ソ／荣誉ノ／アルトコロ／必ズ／苦禍ノ／因アリト／知レ

◎ カノ肺炎ノ／虫ノ息ヲオモヘ／汝ニ恰モ相当ス／ルハタゞカノ状／態ノミ。他ハミナ／過分ノ恩恵ト／知レ。

「カノ肺炎ノ／虫ノ息」とは、三年前の十二月、急性肺炎で生死の境を彷徨った時の記憶であろうか。あの時の「虫ノ息」こそ自分に相応しい状態なのである。いまある全ては「過分ノ恩恵」である。この世で「荣誉」を求めるか勿れ。それは「苦禍ノ因」でしかない。かくして肺を病む賢治の「手帳」には、次のような注目すべき書き込みが現れる。

調息秘術

調息秘術

咳、喘左の法にて直ちに

之を治す

呼吸呼吸 呼吸呼吸

当知是処 即是道場

諸仏於此 得三菩提

諸仏於此 轉於法輪

諸仏於此 而般涅槃

次に左の文にて悪しき幻想妄想尽く去る

為座諸仏 以神通力

移無量衆 令国清淨

諸仏各々 諧宝樹下

如清凉池 蓮華莊嚴

其宝樹下 諸師子座

仏座其上 光明嚴飾

この意味するところについては、前掲『雨ニモマケズ手帳』新考』の解説に拠ることにしたい。

さて、「調息秘術」とは「咳、喘左の法にて直ちに之を治す」とある一種の呼吸法を意味していることは明らか

かである。その呼吸法は、すでに前に説明した法華経如来神力品第二十一に拠る国柱会の「妙行正軌」に示された「道場観」三十二字を呼吸に合せて唱えることであつたらしい。即ち「当」と唱えながら息を吐き、「知」と唱えながら息を吸い、「是」と唱えながらまた吐き、「処」と唱えながら吸うという風に行つたのであろう。／次に「次に左の文にて悪しき幻想妄想尽く去る」と註して記された四十八文字は、法華経見宝塔品第十一の偈の一部であるが、これも「妙行正軌」に「朝昏勤行式」の冒頭第一の「道場観」について第二に挙げている「奉請」の全文である。（『雨ニモマケズ手帳』新考』一八一〜一八二頁）

呼吸法によって、「咳、喘」と「悪しき幻想妄想」とを鎮めんとした賢治のこの実践は、後述する重吉晩年の詩境を彷彿とさせる。一呼吸一呼吸、ひたすらに〈至心念誦〉する〈單純化〉の方向を最晩年の賢治は全身をあげて追求していたのである。

二 八木重吉「病床ノート」とその周辺

重吉は千葉県東葛飾郡千代田村の東葛飾中学校に英語教師として勤務していた一九二六年三月、「肺結核第二期」の告知を受け、同年五月には神奈川県茅ヶ崎町に高田耕安の経営する南湖院に入院、更に同年七月には同町十間坂の借家に移って自宅療養に入り、一九二七年十月二十六日に召天するが、その一年半余りの闘病生活の中で小型のノート五冊に詩や感想を書き付けている。これがいわゆる「病床ノート」であつて、「ノートA」は告知を受けた一九二六年三月〜四月の千葉県柏時代、「ノートB」「ノートC」は同年五月以降の千葉時代から茅ヶ崎の南湖院時代にか

て、「ノオトD」は同年六月〜十月の南湖院時代から自宅療養時代にかけて、「ノオトE」は同年十二月以降の自宅療養時代に書かれたものと推定されている。

信仰詩篇〔大正十五年二月二十七日編〕

次の詩稿は、いわゆる「病床ノオト」期の直前に成ったものとみられる詩稿集「信仰詩篇」の冒頭に置かれているものである（図版資料③）。

病气すると

何も欲しくない

この気持ちにひとつのものも混じへず

基督を信仰して暮らそう

未だ結核の告知は受けていない頃のものと思われるが、罹患の予覚は十分にあったものと推察される。「病气すると」何も欲しくない」——「欲」が取り去られ、ただ治りたいとだけ願われる。

「ノオトA」

賢治の「手帳」にみえるのと同じこの認識は、重吉の「病床ノオト」にも一貫して流れているモチーフといってよ

い。たとえば次のような詩稿（図版資料③）。

○

病气すると

よくあんなに何も欲しくないんだらう

あれでもくらせるのだ

なぜふだんはいろいろ欲しいのだらう

そして数ある「欲」の中でも特に問題とされていたのは、重吉においてもやはり「褒められる」ことへの欲、すなわち詩人としての「名」——「荣誉」を求める心であったようである。例えば次のような詩稿。

私

人が私を褒めてくれる

それが何だらう

泉のように湧いてくるたのしみのほうがよい

願

私は

基督の奇蹟をみんな詩にうたいたい

マグダラのマリアが

貴い油を彼の足にぬったことをうたいたい

出来ることなら

基督の一生を力一杯詩にうたいたい

そして

私の詩がいけないとこなされても

一人でも多く基督について考へる人が出来たら

私のよろこびはどんなだらう

〈ミンナニ／デクノボート／ヨバレ／ホメラレモセズ／クニモサレズ〉——重吉もまた、この静かな境地を願って
いた。しかしそうへナレナイ。自己をも同時に意識していたことは、次のような詩稿からうかがえよう。

○ 神とひとつに生き

そしてどこに怒りがあるか

○

救われているのだから

ただ有難いとおもへばいいのだ

御恩返しのもりで

他の人人をすこしも憎まなければいいのだ

○

恩を返へす気持

ありがたい

一生懸命恩返しをしようといふ気持

○

このさびしさを誰れに告ぐべきか

神に告ぐべし

○

ゆるされ難い私がゆるされている

私はたれをも無条件でゆるさねばならぬ

これらは、素朴な信仰告白というよりも、むしろ〈修羅〉としての自覚から出づる「病苦必死のねがひ」とみるべきであろう。勿論「救われている」「ゆるされている」という詩語の背後には、キリストの十字架による赦罪の信仰が控えているが、ここでは、これに続けて次のような同系列の詩稿が見えることに注目したい。

○

やさしさ

謙遜な心

すなほな信仰

それは浅くても尊い

○

深い人生よりもっといい人生

それは個に徹した人生だ

浅くもなく深くもなく

浅ければ浅いまゝに

深ければ深いまゝに

力をつくして残無い人生だ

○

尊いもの

それは真直ぐにみつめた姿だ

○

人を打つもの

それは巧な智慧ではない

素直ほな信ばかりだ

ここで希求されている「姿」もやはり、賢治において「デクノボー」といわれていたものではないか（―線部）。「巧な智慧」とは無縁の「真直ぐにみつめた」「素直ほな信」、それは愚かで「浅い」と「こなされて」しまうかもしれないが、ヘサウイフ／モノニ／ワタシハ／ナリタイ。そして更に次のような詩稿が続くのである（図版資料④・⑤）。

春の夜

陽二は

お湯から上って

腹をたたきながら

にっこらにっこら歩るきまわってゐる

+

一念に主

を呼ぶべし

この二つの詩稿は、ノオトAの見開き二頁にわたって書かれている。前引の〈浅くても尊い〉という一連の詩稿の終りに位置しているのだが、湯上りの幼い陽二の「姿」は、まさに「素直ほな信」の象徴のごとく重吉の眼に映じた

のであろう。それは〈サウイフ／モノ〉に〈ナレナイ〉自身を照らし出すものであったのではないか。その直後にある十字架のイメージとその下にある「一念に主／を呼ぶべし」は、一人の〈修羅〉の必死の祈願を示していて、賢治の「手帳」の〈略式曼荼羅〉にも比し得よう。無論、重吉における祈願は、〈十字架の主〉に向かってなされている点を見過ごすわけにはゆかない。〈修羅〉としての重吉の希望は、〈十字架における罪の赦し〉にかかっていた。かくして「ゆるされ」つつ最後まで「サウイフ／モノニ／ワタシハ／ナリタイ」と願いつつ続けたところに、賢治の実存と通底する、詩人八木重吉の稀有なる〈求道性〉が認められよう。⁽⁴⁾

おわり」

最後に重吉における〈仏教的背景〉について、一言触れておきたい。先に賢治の「手帳」において「調息秘術」なるメモがあることを瞥見したが、重吉にも次のような詩稿が残されている。いずれも「病床ノート」期の直前に編まれた「欠題詩群」と名付けられている詩稿集にあるものである。

欠題詩群〔推定大正十五年二月以後〕

○

イエス様 イエス様 イエスさま イエスさま

イエスさま キリストイエス イエスさま
イエスさま イエスさま イエスさま
イエスさま イエスさま イエスさま
イエスさま イエスさま イエスさま
イエスさま イエスさま イエスさま
イエスさま イエスさま イエスさま
イエスさま イエスさま イエスさま

頌榮

イエスさま

イエスさま

イエスさま

イエス

イエスの名を呼びつめよう

入る息 出る息ごとに呼びつづけよう

八木重吉と宮澤賢治―〈病床ノート〉を中心に

怒どほりがわいたら

イエスの名で溶かそう

弱くなったら

イエスの名でもりあがって強くなろう

きたなくなったら

イエスの名できれいになろう

死のかげをみたら

イエスを呼んでいきかへらう

これらは、まさに重吉における「調息秘術」というべく、「イエス様」をひたすら繰り返す断片（図版資料⑥）は、「入る息 出る息ごと」に「イエスの名を呼び詰めながら記されたものではないか。そこには〈癒し〉を願う結核患者の「秘術」的な趣と共に、「怒どほりがわいたら」「弱くなったら」「きたなくなったら」「死のかげをみたら」とあるごとく、湧きあがる「悪念」と格闘する「デクノポー」¹¹ Ⅱ〈修羅〉としての重吉を見ることができよう。

「観音経」と重吉

このような、賢治における「至心念誦」を思わせるモチーフ——いわゆる〈一念称名〉の由来を、重吉が幼少期に親しんでいた仏教信仰に求める指摘は、これまでも多くの論者によってなされてきたが、ごく最近になって報告され

た興味深い〈発見〉が、この点についての一つの示唆を含むように思われるので、それを紹介して結びとしたい。

ホームページ「屋根のない博物館」代表保坂健次氏の写真付き報告によると、二〇一一年四月三十日、十二年に一度行われる「武相卯歳観音霊場」の「開扉」の最終日に、重吉の生家近くの大戸観音堂境内にある小屋から、重吉と弟純一郎の連名で奉納された一对の火鉢が見つかった、という。奉納先は「正観音菩薩」、奉納の日付は「昭和二年三月 日」（日付は無し）、奉納者の名は「当所／八木重吉／八木純一郎」と刻まれている。昭和二年三月は「卯歳観音開扉」の直前で、恐らくは、兄の全治を願った弟純一郎が、重吉と連名で奉納したものであろう。勿論茅ヶ崎で療養中の重吉に了承を得た上でのことであつたと推定される。

大戸観音堂と八木家の関わりは深く、「卯歳開扉」のたびごとに地域の「信徒」として「奉賛」（寄付）をしたり燈籠を奉納したりしている。重吉も、大戸観音堂には幼少期から親しんでいたことであろう。

周知のように観音信仰は法華経の「観世音菩薩普門品第二十五」に由来し、「観音経」と呼ばれる「妙法蓮華経観世音菩薩普門品偈」には、種々の厄難から衆生を救う観音菩薩の神通力が称えられている。それは次のようなものである。

妙法蓮華経観世音菩薩普門品偈

世尊妙相具 我今重問彼 佛子何因縁 名為観世音

具足妙曹尊 偈答無盡意 汝聽観音行 善心諸方所

弘誓深如海 歴劫不思議 侍多千億佛 発大清浄願

我為汝略說	聞名及見身	心念不空過	能滅諸有苦
假使興害意	推落大火坑	念彼觀音力	火坑變成池
或漂流巨海	龍魚諸難鬼	念彼觀音力	波浪不能沒
或在須弥峯	為人所推墮	念彼觀音力	如日虛空住
或被惡人逐	墮落金剛山	念彼觀音力	不能損一毛
或值怨賊繞	各執刀加害	念彼觀音力	咸即起慈心
或遭王難苦	臨刑欲壽終	念彼觀音力	刀尋段段壞
或囚禁枷鎖	手足被柱械	念彼觀音力	积然得解脫
呪詛諸毒藥	所欲害身者	念彼觀音力	還著於本人
或遇惡羅刹	毒龍諸鬼等	念彼觀音力	時悉不敢害
若惡獸圍繞	利牙爪可怖	念彼觀音力	疾走無邊方
玩蛇及蝮蠍	氣毒煙火燃	念彼觀音力	尋聲自回去
雲雷鼓掣電	降雹濡大雨	念彼觀音力	応時得消散
衆生被困厄	無量苦逼身	觀音妙智力	能救世間苦
具足神通力	廣修智方便	十方諸国土	無利不現身
種種諸惡趣	地獄鬼畜生	生老病死苦	以漸悉令滅
真觀清淨觀	廣大智慧觀	悲觀及慈觀	淨願常譴仰

無垢清淨光 慧日破諸闇 能伏災風火 普明照世間
悲體戒雷震 慈意妙大雲 濡甘露法雨 滅除煩惱焰
靜訟絳官処 怖畏軍陣中 念彼觀音力 衆怨悉退散
妙音觀世音 梵音海潮音 勝彼世間音 是故須常念
念念勿生疑 觀世音淨聖 於苦惱死厄 能為作依怙
具一切功德 慈眼視衆生 福聚海無量 是故応頂礼
爾時持地菩薩 即從座起 前白佛言 世尊 若有衆生
聞是觀世音菩薩品 自在之業 普門示現 神通力者
当知是人 功德不少佛説是普門品時衆中 八萬四千衆生
皆發無等等 阿耨多羅三藐三菩提心

「念彼觀音力」と繰り返し唱えれば觀音菩薩の利益にあずかることができるという信仰は、今日も広く行われてい
るもので、この觀音経が重吉の〈一念称名〉の源流にある可能性は高いのではなからうか。

广大で複雑な詩的言語宇宙を自在にうたった宮澤賢治は、最晩年〈單純〉なる「至心念誦」の境地に進んで〈修羅
の心願〉を「雨ニモマケズ」に託した。同様にひたすら「一念に主を呼ぶ」八木重吉の〈病床ノート〉に見える墨の
十字架には、一呼吸一呼吸超越者と差し向かおうとする一人の〈修羅〉の姿がある。一見〈單純〉とも〈無垢〉とも
みえる重吉の実存に〈折りたたまれた修羅〉を見逃しては、詩人八木重吉の本質を見誤ることになるであろう。賢治

と対比する時、その感を一層深くするのである。

〈注〉

(1) たとえば高等学校の日本文学史副読本である犬養廉他監修『詳解 日本文学史』（桐原書店、三訂版、一九九三年）等。

(2) 草野心平は無名だった生前の二人に自らの主宰する詩誌『銅鑼』（第三号）を送り、同人に勧誘している。次の草野の回想は、無名時代の二人に声をかけた当時の状況を垣間見させて興味深い。

表紙も付けずに謄写刷の中身だけ広州から持ってきた「銅鑼」は黄瀛と二人で糊付けなどをしてポツポツ送った。それは第三号だったが、四号からのために、宮沢賢治と八木重吉と三好十郎とを同人に誘った。三人とも私にとって未知の連中だった。（中略）

八木重吉は佐藤惣之助の「詩の家」の同人だったが、私にはそのなかでの八木重吉がひどく孤独に映ったと同時にひどく異端に見えた。私は黄と二人で寄せ書きをしてこの異端者を誘った。しかしこのまっとうな異端者は至極まっとう清純な義理人情家で、自分は「詩の家」に厄介になってる身だからという意味の、いかにも八木重吉らしい寸法で「銅鑼」にはいることを辞退してきた。巻紙に筆で書いたその筆跡が美しかった。けれども彼の場合、同人辞退で縁が切れたわけではなかった。死後彼の詩集を二つほど編纂したのも、その時の手紙のやりとりがいれば、きっかけになったものでもあった。宮沢賢治へは私一人で書いた。初めてもらったその返事があまりにも意外なものだったのだ、いまでも大体の文面は憶えている。その中には次のような文句があった。

「……私は詩人としては自信ありませんが、一個のサイエンチストとしては認めていただきたいと思えます……」云々。（中略）ともかく、不思議な言いまわしの手紙のなかに同人費として一円の為替が同封してあり、詩が二篇おくられてきた。

〔草野心平『わが青春の記』、オリオン社、一九六五年〕

もし重吉が草野の勧誘に従って「銅鑪」に入っていたなら、賢治との何らかの交流が生じていたかもしれない。現在のところ、重吉と賢治の直接の交渉を示す資料や証言は、残念ながら見出されていない。

(3) この節における「手帳」各頁の文字の解説と引用されている経典については、小倉豊文『雨ニモマケズ手帳』新考』(東京創元社、一九七八年)を参照した。

(4) 〈十字架を见上げる重吉〉の姿は、詩や病床を見舞った友人の証言からも垣間見ることができる。例えば、

葦の折ったのを持って遊びほうけてゐた桃子が

ふとそれを二つに折って妻に紐でしばらせてゐる

おや十字架をつくった

私が床の間へ

自分でつくった白木の十字架をつるしておいたのをいつの間にか覚えたのか

桃子はそれを庭の土を掘ってうんうんうなり乍らたててゐる

〔十字架〕、「ノオト」

また、〈道場としての現世〉という見方については、「病床ノオト」以前の詩稿になるが

そして何より意義のあると思うことは

生徒たちはつまり「隣人」である

それゆえに私の心は

生徒たちにむかっているとき

大きな修練を経ているのだ

何よりも一人一人の少年を

基督其の人の化身とおもわねばならぬ

そればかりではない

同僚も皆彼の化身とおもわねばならぬ

〔明日〕、詩稿集「晩秋」

という一節があり、この背景にも「怒り」の問題が伏在していたとみられる。

〔付記〕 本稿は、日本基督教会第四十五回東北支部学術大会（二〇一一年七月二日、東北学院大学）における同表題の研究発表原稿をもとに作成したものです。学会当日諸先生から賜りました貴重なご指摘ご助言に心より感謝申し上げます。

八木重吉・宮澤賢治略年表

	八木重吉	宮澤賢治
1896(M.29)年		8月、岩手県非碑貫郡花巻町に出生(商家の長男)
1898(M.31)年	2月、東京府南多摩郡堺村に出生(農家の次男)	11月、妹トシ出生
1909(M.42)年		4月、岩手県立盛岡中学校入学
1911(M.44)年		8月、島地大等の講話を聴く
1912(M.45)年	4月、神奈川県師範学校入学	
1914(T.3)年	鎌倉メソヂスト教会のバイブルクラスに通う	3月、盛岡中学校卒業、4月入院、チブスの疑い。秋、島地大等編『漢和対照 妙法蓮華経』に感動
1915(T.4)年		4月、盛岡高等農林学校入学
1917(T.6)年	4月、東京高等師範学校文科(英語科)に入学 一時、小石川福音教会のバイブルクラスに通う	7月、友人らと同人誌「アザリア」創刊
1918(T.7)年	10月、富永徳磨宅を初めて訪ねる	4月、盛岡高等農林学校研究生となる 6月末、肋膜炎に罹り、一か月静養 12月、妹トシの看病のため上京(翌年3月まで)
1919(T.8)	1月、富永徳磨を再訪、受洗を懇請 2月、親友吉田不二雄が急死 3月、富永より受洗、駒込基督教会会員となる 5月、駒込基督教会を去る 12月、スペイン風邪で病臥	3月、退院したトシを伴い帰郷
1920(T.9)年	二か月余の入院の後退院、自宅療養	5月、盛岡高等農林学校研究生修了 10月、国社会信行会に入会
1921(T.10)年	3月、兵庫県御影師範学校に赴任	1月、無断上京、国柱会で活動 8月、トシ病気のため帰郷 12月、稗貫農学校(翌々年花巻農学校)に赴任
1922(T.11)年	2月、風邪で病臥、肋膜炎に罹る 7月、島田とみと結婚 秋ごろからキーツの詩を読む	1月、『春と修羅』収録詩篇制作始まる 11月、トシ死去
1923(T.12)年	5月、長女桃子出生 手製の詩稿集を作り始める	4月、「やまなし」発表
1924(T.13)年	秋、『秋の瞳』を編み、加藤武雄に出版の斡旋を依頼す 12月、長男陽二出生	2月、「風の又三郎」稿成る 4月、『春と修羅』刊(自費出版) 12月、『注文の多い料理店』刊
1925(T.14)年	3月、千葉県立東葛飾中学校に転任 8月、『秋の瞳』刊『詩の家』に寄稿	7月、草野心平と接触、『銅鑼』に寄稿始まる
1926(T.15)年	2月、風邪で病臥 3月、草野心平来訪 結核第二期の告知「病床ノオト」を書きはじめる 5月、茅ヶ崎の南湖院に入院 10月、病床を富永徳磨が見舞う	3月、花巻農業学校依願退職 8月頃、羅須地人協会設立
1927(S.2)年	3月、弟純一郎と連名で大戸観音堂に火鉢を奉納 7月、東葛飾中学校を依願退職 10月26日、死去(29歳)	5月以降、東奔西走し肥料設定・稲作指導にあたる
1928(S.3)年	2月、『貧しき信徒』刊	3月、石鳥谷で肥料相談に応ず 8月、発熱病臥 12月、急性肺炎
1929(S.4)年		病臥続く
1930(S.5)年		春、やや回復
1931(S.6)年		2月、東北砕石工場技師となる 9月、上京後再び発熱、死を覚悟し遺書を書く 帰宅して病臥 11月、手帳に「雨ニモマケズ」を記す
1932(S.7)年		3月「グスコープドリの伝記」発表
1933(S.8)年		9月21日、死去(37歳)

八木重吉と宮澤賢治―〈病床ノート〉を中心に

図版資料

① 十界曼荼羅



賢治が本場としていた十界曼荼羅（口絵）の読み本

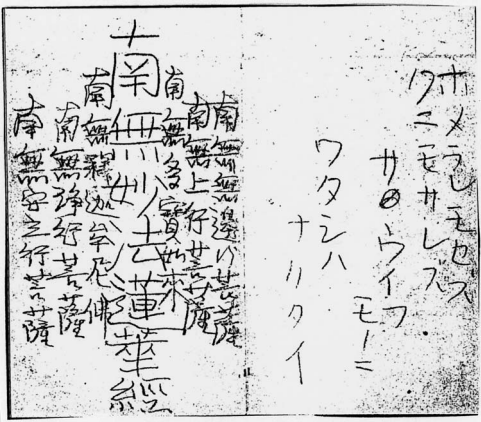
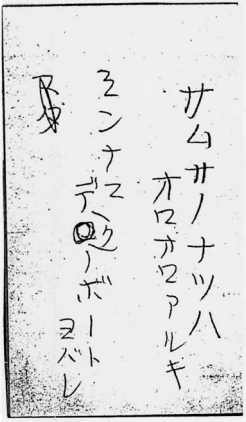
大特因天王		(不動明王の種子)	
南無無上行菩薩	南無三世諸仏	大白次天王	菩提薩多
南無上行菩薩	南無上行菩薩	大梵天王	南無文身大師
南無多宝如来	南無多宝如来	南無大智度母	南無文身大師
南無妙法蓮華經	南無妙法蓮華經	南無文殊師利菩薩	南無文身大師
南無淨行菩薩	南無淨行菩薩	南無文殊師利菩薩	南無文身大師
南無安立行菩薩	南無安立行菩薩	南無安立行菩薩	南無文身大師
大毘沙門天王	大毘沙門天王	南無安立行菩薩	南無文身大師

南無長天女 南無長天女 南無長天女

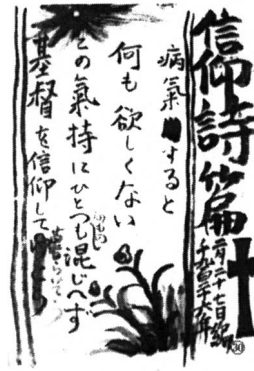
南無長天女 南無長天女 南無長天女

南無長天女 南無長天女 南無長天女

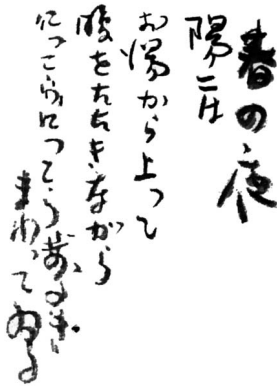
② 「雨ニモマケズ手帳」より



③ 「信仰詩篇」より



④ 「ノオトA」より



⑤ 「ノオトA」より



⑥ 「欠題詩群」より

イエス様 イエス様 イエスサマ イエスサマ
イエス様 イエス様 イエスサマ イエスサマ
イエスサマ キリストイエス イエスサマ
イエスサマ イエスサマ イエスサマ
イエスサマ イエスサマ イエスサマ
イエスサマ イエスサマ イエスサマ
イエスサマ イエスサマ イエスサマ
イエスサマ イエスサマ イエスサマ
イエスサマ イエスサマ イエスサマ

〔図版出典〕

- ① 小倉豊文『「雨ニモマケズ手帳」新考』口絵
- ② 新潮文学アルバム『宮澤賢治』（新潮社、一九八四年）
- ③・④・⑤・⑥ 『八木重吉文学アルバム』（筑摩書房、一九八四年）